

転勤族の妻たちの「故郷」観

千田 智子

序章 はじめに

本稿の目的は、故郷観の検証である。

本稿においては、インフォーマントとして転勤族の妻たちを設定した。なぜ転勤族の妻たちなのかといえば、社会的に表立ったインパクトを表出せず、諸々の学問分野においても正面から問われることもほとんどないこと、これがまず第一の理由である。第二の理由は、社会のエア・ポケット的なところに位置づけられながらも、だからこそ彼女たちに、社会に対する「不可視」のエネルギーを感じることが出来るところにある。

本稿では、転勤族の妻たちから得られた、具体的な証言を基軸に故郷観を検証するため、故郷観を網羅的に語ることを意図したものではないし、強引に抽象化されたレベルに吸収することも避けたい。したがって、論文の構成としては、転勤族の妻たちの日常世界に関する考察と故郷観の検証という二本の柱が並立し、その間には少なからず断絶も認められるであろう。だが、本稿において予定している故郷観の検証の目的は、個々の具体的証言を網羅的に提示された故郷観のなかに的確に配置することではない。むしろ故郷観を考える道筋自体を多少なりとも見出すことが目的である。

第1章 故郷論の展開とその成果

ひとくちに故郷論と言っても、扱うスケールも、及びそれを扱う者のスタンスも様々である。しかし共通の前提として指摘できるものは、「故郷は既に喪失した」という時代のステージのうえに自らを置いていることである。

昭和30年代の「高度経済成長期」、急速に進んだ産業の高度化・都市化は、都市と農村の生産所得の格差を広げながら、一方では都市と農村の社会的距離を縮めていった。結果として眼前にある村や村落共同体は、経済的にも精神的にも“抛り所”としての役割を担いきれなくなり、実体とし

てある故郷は社会的に喪失した。

このような文脈は、故郷論を語る上でまず共有されているとみて良いだろう。そうなると、少なくとも昭和30年代までは、実体としてある故郷が存在したのだということになる。

だがここで、実体としてある故郷とは何だったのかと考える。そんなものが本当にあったのだろうか、と。勿論いま述べた様な事由から故郷喪失を語ることは間違いではない。間違いではないがしかし、より故郷が人々にとって社会にとって「リアル」に「見えていた」のは、それまで故郷がもっていた、あるいはもたされていた意味や背景や存在理由が希薄になり、まさに故郷喪失が叫ばれるようになってからではないだろうか。このときにこそ、故郷が、故郷というものへの社会的な要請（思い入れと言い直すこともできる）が、「生産」されたとはいえないだろうか。

そうして実態を喪失した故郷に対し、俄に創造する故郷なるものが語られる。つまり、かつての実体としてある故郷は日本中どこを探しても無いのだから、それに代替する心の抛り所を、何らかの形で創り出そうという試みである。

見田(1971)は『「家郷」は今や、そこから出でてそこに環るべき所与としてでなく、自らここに建設すべき課題として現れはじめる』(p.6)という転回を1960年代にみている。このような文脈において、対立する2項としてイメージされているであろうものは「所与としての故郷」/「創造(建設)する故郷」である。しかしこの2項は、ともに故郷が生産される局面の裏表であって、同じシーンをどちら側から捉えるか、その違いだけの様に思える。つまり、この2項が用意されたのは、故郷を主に分析する際の準拠枠の都合であって、どちらも故郷というものへの社会的な要請とでも言うべきものであり、相違するのはそれをつめる視角だけではないだろうか。

しかし実際に故郷を論ずるとき、2項対立的に設定された準拠枠の設定は、各人においてどちらかの引力に必要以上に引っ張られている感がある。

故郷に対する社会的な要請と個人レベルの要請（思い入れ）が混然一体となったところにこの引力は発生する。つまり、各人はある社会的・時代的コンテクストのなかで故郷論を論じるが、同時に、各人の論の核にあるものは、自らの「故郷」体験に他ならない。だが具体的証言を軸に捉える本稿の段階において、さしあたって必要なのは、この引力を分析し無化しようと努めることではなく、比較的引力の及ばぬところにスタンスを設定することである。そして、「故郷に対する要請」を一つの球体として捉えることである。つまり、どこまでを所与と捉えてどこからを創造とするか、個人的なレベルでは、どこまでを「生まれ育った」とみなすのか。その境界線を執拗に追求することもしないし、その枠組みを使用して故郷を分析したりもしない。その2項を区別せず、全く同列に扱う。（無論それらを即、故郷と呼ぶにはまだ手続きが足らないので、ここで語る故郷はカッコ付きであるが。）

現在の故郷を形作っているものは、故郷が生産されたときの「故郷に対する要請」と本質的には変わっていない。よってその球体の重心に位置して、現在の「故郷」観を観察することが、生産時にみえたシーンから脱却して、新たな展開のなかで故郷を語ることになるを考える。

第2章 調査の方法と対象者の属性

(1) 調査の方法

名古屋市東山学区に在住する20人の「転勤族の妻」に聞き取り調査を行った。1人あたりの所要時間は1時間から2時間である。調査対象者の募集と選定の方法は、基本的に調査対象者に次なる調査対象者の紹介を受けるといふ、いわゆる“いもづる式”による。

調査の対象者は、35-43才の転勤族の妻20人である。ほぼ全員が母親であり、2-3人の子供が、幼稚園から小学校高学年の間にいるのを平均的な像と考えてよい。また彼女たちの大半は現在就業していない。一方ほぼ全員が習い事やサークル活動に参加している。

(2) 調査内容

調査内容は大きく分けて、以下3つの柱から成

る。^{註A} 対象者に関する基本的属性 B. 日常生活（自分の活動範囲の拡大方法と、それに対する姿勢など） C. 経験的「故郷」観

第3章 彼女たちの日常世界

(1) 結婚と出産

豊田市の広い一軒家に生まれ育ったSさんは、結婚して初めて東京での狭いマンション住まいを経験した。

「主人の帰りは遅いし、社宅じゃなかったから話す人はいないし、勿論知り合いもないし。毎日お手紙ばかり書いてたわね。」

いまでもそのマンションの白い壁が日に焼きついているというSさんと対照的なのは、結婚してすぐに社宅に入ったWさんだ。Wさんは「知り合いがいなかったけど、（社宅内の）皆さんが本当に良くしてくださったから」と、良い思い出として当時を振り返る。

子供が生まれると、彼女たちの日常世界はあつと言う間に子供に埋め尽くされる。いわば、子供世界の周縁に彼女たちの日常があるのである。

まず、先の孤独感からの突破口は開ける。「乳母車を引いて公園をウロチョロしてれば誰かが声をかけてくれる」のだから。そして同じ公園に子供を連れてくる顔ぶれは次第に一定してくるし、時間に規則性もある。「あら×時。××さんたちが公園にいらっしやる時間だわ。それじゃアタシも。」といった具合にして、同じ年代の母親どうし友達になる。

Wさんは、結婚と同時に東京に来て、ここで3人の子供を出産し、末子が3才のときに転勤になった。このころの友達とは今も仲がよく、転勤するときも別れ難かったという。Wさんに“心のふるさと”をたずねると、生まれ育った名古屋を挙げつつも「あと半年あって、その人達と遊べたら（東京が）“心のふるさと”になったかも。」という。「とにかく余裕がなかったのよ。“東京イコール子育てしてきました”って感じで。」

(2) 社宅

悪評高い社宅ではあるが、知らない土地で、全くツテ無しに人間関係を一から築いてゆくのは、個人差はあろうが、かなりの精神的負担を伴う。

まして彼女たちは何度となくそれを繰り返さなければならぬのだから、はじめから属性の判明している人間たちが新地に用意されているという状況から便益を受けることも多々あるのだろう。「知らない場所に行くには安心」「社宅にいれば少なくとも誰かと話せる」という評価は、こういう事情からきている。

だがやはり、悪評は根強い。「すごく狭い世界よね。いい噂って言わないのよ。その代わり悪い噂はバーッと広まるの。」「直接言わないんだけど、“結構、服持ってるわね”とか、“あら、またお出かけ。どこおでかけかしら”とかね。そういうこと気にするのが好きな人、絶対いるのよ。」そういう性質はときに「お揃いの生地でお揃いのバッグをつくったり」という横並びの加速として現れる。

社宅の人間関係は、子供を媒介として一層強固なものとなる。「子供を預かったり預けられたり」という相互扶助は、ほとんど当然のように行われている。「子育てするには結構便利よ。気心も知れてるしね。」と、この点に関しての評価はかなり高い。

だが、社宅の住人というのは当然、会社関係者であるから、互いに「警戒心は常にある」存在である。実際、夫の役職によって部屋数の違う社宅もあるそうで「うちに帰ってきて夫の仕事の延長」だという。こうした社宅内の緊張関係が、「ひと所に住むのは2年ぐらいの方が、社宅の厭な部分を沢山見ずに済む」と言わしめる。

(3) 海外経験

結婚後、夫の赴任に伴って初めて海外で暮らしたという人が多いが、その場合共通して見出せるのは「結婚して子供ができたなら、何となく人生の先まで見渡せてしまう。そういうときの刺激剤になった。」という心情である。

デトロイトで出産を経験したSさんは、「近所の日本の方達が助けてくださったんですよ。出産は日本でしても大変なことでしょ。ご飯をつくりに来てくれたり、本当に感謝してるの。家族以上って感じたわねえ。」

Tさんは、海外赴任の辞令が下ったときにはショックで泣き出したという。だが「楽しかったよそれが。」「日本だとまず親でしょ。親戚で

しょ。結婚式があってもお葬式があってもお呼びがかかるでしょう。そういうものから全く解放されて。日本にいたら、こんな風にお友達と家族ぐるみで付き合いえなかったと思うわ。」

(4) 墓

まず“実家の墓に入りたい”と考えている人が予想外に多かった。その理由としては、「その方が何となく安心できる」、(夫方に代々の墓がある場合)「全く知らない人ばかりが眠っているところに入るのは抵抗がある。」というものに代表される。その心情は、嫁ぎ先に相容れないものを感じる度合いが強いほど表に出てくる。「妻になったことには後悔はないが、嫁になったことには後悔している。」と言う長男の嫁Nさんは、嫌いな場所に夫の実家を挙げた。「性格的に多分一生馴染めないもの。主人にはいてほしいけど、本音をいったらやっぱり実家に入りたいわよ。」

(5) 考察

転勤に伴い移り住む所で自分の日常世界をいかに拡大してゆくか、具体的には人間関係を築いたり自分の活動の場を広げることに對しての姿勢を聞いた。

「おしり重いほうなの。ネクラのA型人間だから体力要ります。」

「皆様はどちらかという広く浅くのお付き合いがお上手で転勤族を楽しんでいらっしゃるみたい。私は狭く深くっていうタイプだから基本的に転勤族に向いてないんです。」

「若いうちは熱心に頑張ってたんだけど、歳とるにつれ(熱意が)うすれていくわねえ。」

「物怖じなんてしてたらやってられないわよ。」

これらから浮かび上がるのは、客観的には「与えられる」新地をいかにポジティブに捉え、転勤という生活パターンを楽しみ、かつそれによって成長してゆくという理想像である。それにどれだけ近づけるかで自分の値打ちが決まるという強迫感に似たものささを感じる。新地において克服すべき状況がハードであればあるだけ、それを乗り越えたときの達成感は大きく、その土地に対しても愛着が深くなる。そして克服したという自負が、彼女たちをまた次の転勤へと向かわせる。この良性の循環を彼女たちは是非とも維持し続けねばな

らない。こうして愛着を示す土地が「故郷」に昇華することがあるとすれば、それは自我により〔征服〕された故郷といえるだろう。この点に関しては次章で詳述することとする。

第4章 彼女たちのライフヒストリーにみる「故郷」

第1節 「故郷」観その1

(1-a) Aさんのライフヒストリー

Aさん(35才)は、高校卒業まで名古屋市内の「庭付き一戸建て」で過ごした。3年前に夫の転勤で、生まれ育った名古屋に戻ってきて、両親は「そりゃもう喜んで」いる。

高校卒業後、Aさんは「ずっと“絶対東京に出たい”と思ってたから」東京の大学に進学する。大学卒業後、一旦は名古屋で就職するが、在学中に知り合った現在の夫と結婚して再度、東京で生活することになる。

新婚生活は夫の学生時代のなじみの街での「仮住まい」から始まった。ここで3年を過ごした後、世田谷にマンションを購入した。子供を育てるにはいい環境だと、家自体も街も気に入っていたが、一年半後に名古屋赴任の命が下る。

Aさんに幼少のころのことをたずねると、「一戸建ての家で、庭があって。ああ、外で遊ぶのが大好きな子だったのよ私。家の周りや近所で日が暮れるまでずーっと遊んでたわね。」「父は転勤族じゃなかったし、家ってのうは、そこに根が生えてずっとそこにあるものだって感じてたわね。どこに行くにも、どこに行っても、そこが起点というか。」

「でもねえ、知りたがりだからじっとしていらなかったの。それとうちの母がね、名古屋大好き人間なの。名古屋では、娘は嫁に行ってもずっと親の側にいて面倒みるものだっていう暗黙の何かがあるじゃない？そういうのが息苦しかったっていうのも正直言ってあったし。」

「そうそう、今でもね、夢に出てくるんだけど、その家の私の部屋のね、机に座ってるときに視界が入るものってというか、風景というか。それがね、もう目に焼きついてるの。それで、そのころ思っちゃったのは“ああ、これだけ見てあたしは死ぬのかな”って。」

(1-b) Mさんのライフヒストリー

Mさん(39才)は石川県金沢市に生まれる。金沢は父方の先祖代々の地であり、両親は現在に至るまで金沢在住である。

高校卒業まで金沢で暮らした彼女は、東京の大学に進学した。卒業後、見合いで現在の夫と結婚し、生活の拠点は東京となる。「どこに住んでも多少は疲れるんだけど、やっぱり東京にいるのが一番安心。」と言う。

翌年、子供を産んでもまもなくイギリスに赴任した。在英生活は約6年続き、帰国しての赴任地は大阪だった。2年を経て、やっと東京に帰って持ち家を購入。名古屋に転勤になったのは1年半前である。

生まれ育った金沢に対しては「私の物の考え方は金沢的じゃないの。女が意見を言うとか嫌われるのよ。そういうところなのよ。」「私のメンタリティにつながるものはないわね。」と金沢と自分との心的な距離を強調する。だが一方で「じゃ東京人かって言われれば、そうじゃないのよ。仲間に入れてもらってる感じがどこかでしちゃうの。

“競ってる、頑張らなきゃ”の場所が東京なの。」と東京に対しても一定の距離を感じている。彼女にとって自我形成の場は主に東京であった。しかしそれは常に緊張関係のなかで切磋琢磨してゆくものだった。「もっとリラックスして自分らしくありたいと思う。だから老後は軽井沢が夢。」いささか唐突の感があるが、幼少のころから休暇は軽井沢の別荘で過ごしていたそうだ。「住んでいる人は東京的。でも風景とかに金沢に通ずるところがあるの。」

(2) 考察その1

Mさんをまず例にとると、彼女にとっての「東京」への愛着は、自我形成の過程に対する愛着の発現とみることが出来るだろう。従って、第3章で触れた、自我により〔征服〕される故郷として考えられる。軽井沢はその延長線上に位置する。

こうした〔征服〕される故郷、自我形成の背景となる故郷の対極として考えられるものがある。

「自分で予期せず生まれてしまったそのふるさととの終生の関係を憎む視線がない以上、ふるさとと〈対決〉することができません。」

これは松永(1975, p.198)のことばであるが、

ここでの故郷は、その人によって〔征服〕されるのではなく、終生その人と意味のやりとりをし続けるという〔対決〕の構図をもった故郷として描き出されている。Mさんが心的な距離を強調してやまなかった「金沢」、これはこの範疇に入るだろう。Aさんの「名古屋」も同様と思われる。

第1章でいう「故郷に対する要請」を本稿で扱う個のレベルで展開すると、その人が抱く故郷に対する思い入れということになる。それを分析し、「故郷」とその人との意味づけの関係を考えるものとして〔征服する故郷〕と〔対決する故郷〕という2つの故郷を念頭に置いてみる。

〔征服する故郷〕、これは一定の意味を（この場合自己によって）与えられ、与えられた時点で静止画像に転化し、背景に後退してしまうと考えられる。一定の場所化が起こってそれが固定化し、継続している状態とも言える。それに対して〔対決する故郷〕は、静止せず動態であり続ける。終生自分の中で意味を与えてはそれを否定する、この関係性を継続するものだといえるだろう。換言すれば、没場所化を繰り返すものである。

だがさらに観察すると、例えばMさんにとっての「金沢」は、その関係性の主体はあくまで自分であって、その関係性を解読することによって得た意味が、常に自分に回帰している点（自己に収束している点）に注目すべきであろう。この意味では、これは〔征服する故郷〕なのだとも言える。つまり、意味を与えつづける関係性から言えば〔対決〕だけれども、自己にその意味を収束させてゆくという意味では〔征服〕である。

より〔対決〕に近い感覚の例を挙げるならば、Aさんの名古屋の一軒家の「机の前の風景」ということになるだろうか。意味を与えては否定するこの関係を、その関係性自体が本質だと感じさせるには、この程度の狭小な空間スケールのほうが適切だという感がある。なぜならこのような関係性は「リアル」な触感を基に、その感覚によって成り立つものだからである。そう考えるならば、故郷とは、こうした狭小な空間スケールにおいて持続される関係性が、モザイク状に入り組んだ総体として捉えることもできるのでないだろうか。

ただ付け加えるならば、〔対決〕に近い感覚とした、Aさんの「机の前の風景」であっても、その関係性の意味づけの決定権は常に自己に帰属し

ている。自分が故郷に意味を与えているのか、故郷が自分に意味を与えているのか、その方向性のあり方に対し（たとえそれを意識しないにせよ）辛うじて「根本的」に疑いをいれることが可能であるのが、故郷であろう。そういう意味では、やはり〔征服〕よりは〔対決〕のほうが「根本的」ではある。だが、そういった〔対決〕でさえ、〔征服〕に収束してしまうのである。

第2節 「故郷」観その2

(1) Hさんのライフストーリー

Hさんの父は転勤族だった。長崎で生まれて、6才で福岡へ、9才で神奈川県藤沢市に引っ越した。ここで大学3年生まで暮らした後、結婚までの4年間は町田市に住んだ。このうち10年余を過ごした藤沢以外については「通過点で感じ。友達も続かないし。」とコメントをしている。

結婚生活は横浜のマンションで始まった。だが結婚後1ヶ月にして夫にベルギーへ研修の辞令が下る。1年を過ぎて帰国し、再度横浜での生活が始まった。

横浜に戻ってから1男1女に恵まれ、7年目にドイツへ赴任。5年間暮らしたドイツには一家揃って愛着を感じている。そして去年から名古屋へ。だが来年くらいにはまた転勤の可能性が大きく、いま住むところは「腰掛け的。通過点。」に過ぎない。

Hさん一家は、横浜にマンションを所有している。横浜は、Hさんは勿論、Hさんの夫にも双方の両親にもゆかりのない土地である。横浜とHさん一家を結ぶものは、夫の仕事の関係上の事情のみがある。“将来売却するかもしれない”という不透明感も当然ある。

だが、彼女は横浜を「帰るとホッとすることのふるさと」と捉えているし、「藤沢（幼少期についてたずねたところ、彼女は藤沢の情景を回想した。）が海沿いだったから、海に近いところが良かった。内陸ってだめなの私。」と横浜の場所性を評価している。また、横浜を死にたい場所の回答の1つに挙げていることから、横浜に愛着をもち、少なからずそこに永住する意思のあることがうかがえる。

(2) 考察その2

これまでにみてきたのは、その人自身と「故郷」との関係の構図である。その構図にのみ当てはめれば、Hさんにとっての「ドイツ」や「横浜」は「征服する故郷」の範疇に分類できる。しかし、ここにはさきの構図とは全く別の論理が働いていると思われる。それがより象徴的に現れているのは、Kさんの以下の述懐である。

「私たち（夫婦）は変わらないんだけど、この子はどんどん大きくなっていくでしょ。あの場所には、1才のこの子しかいないし、その場所には3才のこの子しかいないし。逆に言うと、この子が幼稚園に入った場所は1つしかないし、小学1年生でいるこの子は今ここにしかないの。だから、子供の成長記録と相まっているいろんな場所が、かけがえの無いものになっていくっていう感覚よね。」

かつて坪井（1986a）は、今日の故郷は、実の親を媒介とした実体としての故郷であり、共に住んだ者どうしが経験し、共有した生活感覚が故郷の本質であるとした上で、「新しい土地で男女が相寄って家族生活を営もうとするとき、そのいずれにも（夫の故郷にも妻の故郷にも）属さない新しい故郷を子どもたちに創り出していく思想」（p.276）が現れるとした。

そして「子どもたちにとって、今を共に生きて住む者が共通に経験している感覚が故郷の中味であるとしたら、親はなるべくその感覚を形として、あるいは映像として残してやりたいという認識」を生ずるといふ。

HさんやKさんの述懐には同じ思想を感じることができる。ここにあるのは、次世代へと継承されてゆくという連続性である。親と（母と）子が共有することの出来る生活感覚を確認する、それを懐かしんで思い出す。これが故郷を子供たちに与えることになる。継承されるかどうか、たとえばHさんの子供が、「ドイツ」や「横浜」を自分にとって意味ある土地として認識するか否かは甚だ不確かではあるけれど、それは問題ではない。要は、Hさんが子とその感覚を共有したいと願った、その思いがこの場合、故郷の核だからである。

終章 おわりに

本稿は、転勤族の妻たちの証言を基軸に、故郷観の完態の一端を観察しようと試みたものであるが、言うまでもなく転勤族の妻たちというのは、女性であり、転勤を繰り返す夫に、客観的には「ついていく」存在である。加えて、まだ若い年齢層を対象にしたので、故郷を「深く」語るに社会を代表する存在ではない。このような特性から出てくる限界を考慮に入れずに、本稿の調査結果のみを用いて、ただちに故郷なるものの再定位を一般的に行うことは出来ない。したがって第1章で触れたように、本稿で扱った故郷はカッコ付きである。だが、それならばしかるべき複数の層の証言を基にすれば、点と点をつないで線にする要領で、故郷を一般化できるかというところではない。第1章で述べたように、故郷に対する社会的な要請と個人レベルの要請が複合したところに働く引力の比較的及ばぬところにスタンスを設定しようとしたのが本稿である。カッコをはずすためには、この引力をその出所から問い直し、それをつくり上げているものを多少なりとも観察せねばならない。それは故郷を歴史的なものであると同時に共時的なものとして捉えることになるが、これについては今後の研究課題とする。

(注)

質問項目

- 聞き取りで使用した調査票の内容をそのまま記す。実際は、言葉の使い方・質問の順序はこの通りでなく、対象者の事情が許すかぎり、これ以外の質問とライフヒストリーの聞き取りを行った。
- Q1-1. お名前・ご住所・電話番号
- Q1-2. 家族構成と現在までの移動の経歴（それぞれの場所に関する簡単な説明・感想、持ち家の有無等含む）を教えてください。
- Q2-1. 現在何らかの仕事に就いていらっしゃいますか。過去に就業の経験はおありですか。
- Q2-2. サークル活動や習い事など交友関係を広げたり自分の趣味や才能を生かすために何かしていらっしゃいますか。
- Q2-3. (1)お友達はどの様な関係の方が多いですか。

- (2)前に住んでいらしたところで知り合った方とお付き合いはどの様に続けていらっしゃいますか。
- Q 2-4. 知らない場所に移り住んで、新しく人間関係を築いたり、活動の場を広げたりすることに物怖じしませんか。またそういうことに意欲的に取り組むほうだご自分で思われますか。
- Q 3-1. ご両親について（大方、妻方とも）
 (1)お住まいの所在
 (2)ご両親との行き来はどの程度ありますか。
- Q 3-2. ご親族とのお付き合いの程度は。
- Q 4-1. ご自分の幼少の記憶をたどると、その背景となるのはどんな場所（情景）ですか。
- Q 4-2. 愛着や思い入れのある場所、「またここに住みたい。」と思える場所など教えてください。（具体的な場所でも「～のようなところ」でも結構です。）
- Q 4-3. 嫌いな場所、「もうここには住みたくない。」と思う場所など教えてください。（同上）
- Q 4-4. 持ち家はどこに持ちたいですか。購入済の場合は、そこに家をもった理由を教えてください。
- Q 4-5. お墓について
 (1)所在地と管理状況
 (2)ご自分のはいるお墓について何らかのご予定はおありですか。またそれにたいしてご希望やお考えをおもちですか。
 (3)「できるなら最後はこういう場所で死にたい」という場所がありましたら教えてください。
- Q 4-6. 「故郷」「ふるさと」ということばから思い出されるのはご自分にとってどここといえますか。
- Q 4-7. もし「心のふるさと」というものがあるとすればご自分にとってどこだと思われますか。

文 献

- 阿部 一（1990）：景観・場所・物語—現象学的景観研究に向けての試論—。地理学評論，63A-7, 453-465.
- 沖藤典子（1991）：『転勤族の妻たち』講談社（文庫），304.
- 奥野健男（1972）：『文学における原風景—原っぱ・洞窟の幻想—』集英社，301.
- 加藤典洋（1990）：『日本風景論』講談社，333.
- 加藤典洋（1992）：「風景」以後。現代思想，20，182-191.
- 柄谷行人（1988）：『日本近代文学の起源』講談社（文芸文庫），270.
- 川添 登（1988）：国民文化形成と「ふるさと」幻想。春秋生活学，3，44-51.
- 倉石忠彦（1989）：「ふるさと」の変貌。国立歴史民俗博物館研究報告，24，147-167.
- 小山修三（1993）：膨張する故郷。石毛直道編『現代日本文化における伝統と変容9 昭和の世相史』ドメス出版，79-98.
- 高橋勇悦（1970）：都会人とその故郷。明治学院論叢，165，47-71.
- 高橋勇悦（1981）：『家郷喪失の時代』有斐閣，227.
- 谷川健一（1988）：新ふるさと論序説。春秋生活学，3，18-26.
- 坪井洋文（1986 a）：故郷の精神誌。谷川健一他編『日本民族文化体系12 現代と民俗』小学館，267-308.
- 坪井洋文（1986 b）：故郷と都市民。『民俗再考—多元的世界への視点—』日本エディタースクール出版部，214-226.
- 福田珠巳（1991）：場所の経験：林美美子『放浪記』を中心として。人文地理，43，69-81
- 福田珠巳（1993）：近・現代文学にみる故郷の概念。徳島県立博物館研究報告，3，25-38.
- 占田隆彦（1988）：商品としての“ふるさと”。春秋生活学，3，140-147.
- 松永伍一（1975）：『ふるさと学』講談社（現代新書），201.
- 真野俊和（1990）：「ふるさと」と民俗学。国立歴史民俗博物館研究報告，27，303-328
- 見田宗介（1965）：新しい望郷の歌—現代日本の精神状況—。『現代日本の心情と論理』筑摩書房，5-16.
- 見田宗介（1978）：『近代日本の心情の歴史—流行歌の社会心理史』講談社（学術文庫），258.
- 宮田 登（1988）：流行歌の中の「故郷」観。春秋生活学，3，130-137.
- 渡邊一民（1992）：『故郷論』筑摩書房，194.